

日野真美氏に聞く 日米の違いがあるから 2 倍楽しい



マンハッタンに臨む
会議室にて

一通の手紙から弁理士へ

アメリカ・ニューヨークで知的財産権を専門に扱う Pennie & Edmonds LLP に特許弁理士として勤務する日野真美氏は、主に薬学、バイオ、化学関係のほか医療器械などの特許出願を手がけている。クライアントは 8 割近くがアメリカの企業、残りは日本とヨーロッパの企業が半々だという。

「たまに、日本の特許法の関連で意見を求められるようなことはありますが、特に日本人であることで、他の弁理士と違う扱いをされている点はありません。最初は日本語を活かせる日本のクライアントを任されるのかと思っていましたが、日本の企業だからという理由で私が担当することはありません。日本の案件だけ扱っているのでは、アメリカで仕事をする意味がありませんので、私にとってはありがたい待遇です。」

氏は京都大学薬学部を卒業後、大手製薬会社勤務を経て 1992 年に弁理士試験に合格した。そもそも弁理士の存在を知ったのは、薬学部で一緒だった友人から来た一通の手紙によってだった。

「弁理士になったという案内で、初めて弁理士の仕事に関心を持ったのです。製薬化学を専攻して、就職先では基礎研究に携わりました。研究所で特許出願することもありましたが、当時は関心を持っていませんでした。研究は好きだけれど、学位があるわけではな

いので、続けるのは難しい。弁理士ならば、勉強してきたことを活かせるし、力仕事でもないから自分でもできるかもしれない、面白そうだなと思いました。今考えると、甘い考えだったと思いますが。」

さっそく履歴書を持って探ってもらえそうな大きい特許事務所を回って歩き、朝日奈特許事務所に入る。実際の仕事を学びながら、試験勉強も同時に進め、2 年で資格を得た。仕事の経験を積む中で、アメリカの判例などについても興味を持ち、自分なりに勉強を始めていた頃、お連れ合いのアメリカ転勤が決まった。

「その時、ロースクールに行けるかもしれないと思うてうれしくなりました。英語が苦手だったのに、根が楽天的なんですね。」

アメリカの弁理士資格を持つ氏が英語は苦手だったと言っても、にわかには信じられない。国際化の時代に外国語はできたほうがいいけれど、英語はあきらめて、アメリカ行きが決まる前はスペイン語を習っていたくらいだと、氏は笑う。

ロースクールから始まる競争

94 年に渡米。まず英語の勉強に取り組んだ。ロースクールに入るためには、決められた TOEFL の点数をクリアしなければならない。

「せっかくアメリカにいるのに、何も楽しまないで

英語の勉強ばかりして、そんなにやってもロースクールは無理よ、と親身に言ってくれるアメリカ人の友人もいたのですが、くじけずに続けました。」

1年がかりで TOEFL の得点、さらにロースクール入学のための共通試験 LSAT の得点を揃えて念願のロースクールに入る。ニュージャージー州の住まいから通学しやすいことから選んだロースクールだが、いざ入学してみたら留学生はほとんどいなかった。英語で学ぶことの困難さを分かち合える友人を求めて、教室を巡り、東洋人らしき人に声をかけ、日本人を探し歩いたそうだ。

「ニュージャージーは日本人もたくさん住んでいるのですが、あれほど日本人を探したことはありません。警備のおじさんや職員にも、日本人を見ませんでしたかと尋ね回ったほど。結局1年たってあきらめました。」

判例を集めたテキストを毎日読みこなして予習するだけでも、ネイティブの人よりずっと時間がかかる。しかも授業はソクラテスメソッドという形式で、判例について禅問答のように教授と議論をするものだった。

「当てられたらどうしようと思い、みんなそれぞれに自分の論理を展開するのを聞いて、すごいなあと思いい、本当にきつかったです。」

後から気がついたのだが、アメリカ人にとってもこの1年目は相当に厳しいものだったらしい。必須単位が取得できずに2年目に進めない人も少なくないし、自分には向かない世界だと自ら撤退する人もいた。アメリカの弁護士試験の合格率は、例えば最も困難と言われるニューヨーク州ですら70%ほどの高い数字が出ているが、実はロースクールの3年(夜間コースの場合は4年間)の間はかなり淘汰される。「同級生の間での競争意識が強いのに驚きました。ノートを借りることはあっても、和気藹々という感じではありません。」

この点は、弁護士の資格者が日本と比べものにならないほど多いこととも関係しているのだろう。評価の高いロースクールでよい成績を修めていないと、就職先を得ることさえ厳しいという。アメリカでは新入社員に対する実務トレーニングを行わないので、企業の法務部は、即戦力となる経験を積んだ資格者しか採らないことが多い。ロースクールでも実務的教育はあるが、到底即戦力にはなれないことから、新卒者を採用する企業はまずないのだという。まず、法律事務所に入って実務経験を積み、そこで初めて自分の進路を選択す

ることが可能になる。あるいは成績のよい人ならば、裁判官の補助的仕事をするロークラークになるコースもある。就職を決める上で重要なのが、2年目を終えた夏休みに体験するサマー・アソシエイトだ。

「3ヵ月近い夏休みの間、法律事務所で働かせてもらって、実務経験をjするシステムです。学生は1年前から履歴書を出しまくって、受け入れてくれるところを探します。私もいろいろな所へ履歴書を出しました。なかなか難しかったのですが、現在勤めている事務所が受け入れてくれました。毎日オフィスで見るもの、聞くもの、すべて面白かったですね。複数の事務所での経験を積む人もいることは、後で知りました。」



日野氏のデスク

サマー・アソシエイトは、法律事務所にとっても人材獲得のチャンスとなっている。法律事務所は入ったら地獄だが、夏の間だけは地獄も楽しい、というジョークがあるそうだ。よい人材を確保するために、夏休みはパーティや音楽会を開いて、研修に来ている学生を甘やかしてくれる。事務所間の激しい競争に勝つために、一人でも優秀な人材を得る方策なのだ。事務所に必要な人材とみなされれば、夏休みが終わった時点で採用のオファーが出る。

「一夏、よい経験ができた満足していたし、オファーは出ないと思っていた」日野氏にも、オファーが出た。資格を得たら帰国するつもりだったが結局アメリカに残って就職することに決めた。

「もっと勉強ができたら、俄然欲が出て。やっていけるかどうか不安でいっぱいでしたが、夫や家族がとても理解してくれて、こんなに恵まれている私にただ不安だというだけで諦めたのでは女がすたると思いました。」

5月末あるいは6月初めにロースクールを卒業すると、2ヵ月後の弁護士資格試験に向けて、日本と同様の受験予備校に通うのが一般的だそうだ。氏もみっちり受験のためのノウハウをつめこまれて、7月末の試

験を受けた。この時点で、資格がとれるか否かはともかく、オファーを受けた事務所にアソシエイトとして入るのが通例。11月の発表まで落ち着かない日々を過ごした氏は無事に合格。もし落ちて、1回目は許されるが、2回目には事務所に居づらくなり、3回失敗したら辞職を勧告されるという。

アメリカと日本の違い

「事務所に入った当初は、実際に発明者と話すときに、日本語なまりの英語で相手にしてもらえるのかどうか不安でした。でも、アメリカの研究所には外国人研究者も多くて、そういう方たちもお国なまりの英語を使っていることがわかって、とても安心しました。」



インタビュー 岡田 希子

クライアントとのやりとりは電話で行うことが多い。広いアメリカで、クライアントの会社まで出向くことは、時間とお金がかかるので双方にとってメリットは少ないからだ。

米国特許商標庁では、拒絶査定不服審判は口頭で行われる。たまたま担当している件

の口頭審理があったため、日野氏は1年目でいきなりひとりで口頭審理を担当することになった。日本では経験のなかったことだけに、初めて審判官三人を前にしたときはとても緊張してあがってしまったと言う。

「審判官の中にも、なかなかこちらに話をさせてくれない方もいれば、よく話を聞いてくれる方もいます。」その後何件もの口頭審理を担当して、今ではすっかり慣れたという。一方、審査段階で審査官と面接する場合には、面接室ではなく審査官のオフィスを使うことが多いそうだ。

「それぞれの(審査官の)個性が現れた部屋を見ることができて面白いですね。ざっくばらんに話ができる雰囲気になりますし、審査官と心がしれてうまくいくこともあります。」

アメリカでも審査が遅れる傾向にあり、特に審判に係属すると長くかかることから、継続出願にしたり、継続審査請求(RCE)などして審判には上げないやり方が主流になっている。一方、フェスト判決でも明らかになったように補正をしないほうが有利なので、重要なケースについては審判でねばったほうがいいとい

う考え方もある。

「どういう手法をとるのが有利かは、事件の重要さや技術内容、費用との兼ね合いによると思います。書面では理解してもらえなかったことが、審査官に面接でじかに説明してうまくいったケースもありました。面接は議論の細かい内容が審査記録として残らないという利点もあります。」

日本と大きく異なることのひとつに、審査官の勤務時間がある。決められた時間数をトータルで満たせばよいので、審査官は各々の裁量で毎日の勤務時間を決めている。早朝から昼過ぎまで働く人、反対に夜遅くまで仕事をする人、一日の仕事時間を長くとって金曜日は休む人と様々。日本のフレックスタイム制によくあるようなコアタイムも設けられていないので、審査官の勤務時間に合わせてアポイントメントをとったり、面接に行かなくてはならない。

「電話でつかまえて話をするだけでも、結構大変ですね。午後2時に電話をしたら、遅いからダメと言われてたり。USPTOはワシントンD.C.にあるので、早い時間帯に仕事をしている審査官に朝一番に来るように言われても、ニューヨークからではちょっと厳しいですし。」

請求時間で評価されるアソシエイト

法律事務所に勤務する弁護士の場合も、ノルマの時間数をクリアすればよいので、勤務時間は比較的自由に決められる。ただ、アソシエイトの場合は、どれだけ時間をクライアントに請求できるか、すなわち事務所の収入に結びつけられるかによって、評価が決まる。請求できる時間が少ない状態が続くと、解雇の対象になる。

「自己申告した時間を、仕事内容に対して妥当かどうかパートナーがチェックして、多すぎると判断したらカットします。それでも、お客さんから多いと文句がきます。一つの案件について使った時間のどこまでを請求するか、いつもジレンマがあります。タイマーを回しながら仕事をしているのですが、ちょっとした手紙を書くのに思わぬ時間をとってしまった場合、全部計上することはできません。私は要領もよくないので、休日も仕事をするようになってしまって、実際には週休1日の状態です。」

請求時間の多寡で評価される弁護士事務所のアソシエイトは、入ってから2,3年で企業の法務部などに転

職するケースも多い。

「ノルマに追われることに、みんな疲れちゃうんですね。企業に入れば、時間的にも、プライベートな生活にも少し余裕ができます。」

氏は、その仕事の疲れをどのように解消しているのだろう。

「ストレスの多い仕事なので、本当に気分転換が欲しいと思って、最初のお給料で電子ピアノを買いました。毎週土曜日にレッスンに通って、小学生にまじってお稽古をしています。夜でもヘッドホンをすれば弾けるので、ウィークデイに弾くこともあります。」ブロードウェイのショーやクラシックのコンサートにも行くが、一昨年に吉本新喜劇のニューヨーク公演を見に行ったときは心底楽しかった、というのはいかにも関西出身の氏らしい。

現在の事務所に勤務するようになってからも、職場に近いとはいえ、過密なマンハッタンに住むのはなんとなく落ち着かなくて、隣接するニュージャージー州の「リスが屋根裏にいる古いアパート」暮らしだそう。

マンハッタンの事務所に勤務する氏にとって、9.11の事件は日本で受けるのとは比べものにならない衝撃的なものだったろう。

「通勤のバスから煙が出ているワールド・トレード・センターが見えたのですが、習慣というのは恐ろしいもので、そのままオフィスに出ました。その日の遅くなってから、交通機関が復旧してアパートに帰ることができて。事務所は2日後から通常通りの勤務態勢になりましたし、ノルマの時間も変更なしでした。すごいと思ったのは、1週間後からニューヨーク市弁護士会がボランティアを募って、事件の遺族が必要としている死亡証明書や援助金受け取りなどについての研修を行い、相談を受ける活動を始めたことです。私も研修に行きましたが、教材も講師も充実していまし



弁理士会館にてインタビュー

た。資金力とか組織力があるのでしょうか。この活動に参加したことで、ショック状態にあった人たちが助け合い、いやされることを体験しました。ただ、事件が起こった後しばらくの間のアメリカは、外国人にとって居心地の悪いところでした。」

氏の事務所では、年間50時間はボランティア活動が仕事として認められるが、それ以上は自分の時間と仕事をやりくりするしかない。

日米両国での経験を活かして

アメリカのロースクールで勉強したいという人たちへのアドバイスを伺った。

「どこのロースクールでも、特許法の授業が必ずあるわけではありません。特許法や特許関連の授業が充実しているかどうか、事前に調べて選ぶほうがよいと思います。留学生が多い学校では、論文形式の卒業試験の時間を多少長くしているところもあるようです。私も、ネイティブの人に比べて英語でハンディがあるから時間を余分にほしいと掛け合ったのですが、留学生がほとんどいない学校でしたから、認められませんでした。特許法については、たまたまかなり力を入れている学校だったので、この点では幸運だったのですが、もっと調べてから学校を選べばよかったのではと、後になって思いました。」

現在の事務所に勤務するようになって3年。まだまだ勉強し足りないと思うそう。

「これまで、ラッキーでいい経験をしてこられたと思います。将来的には、日本とアメリカで経験を持っていることをプラスにできるような仕事をして、クライアントに貢献できればと思います。」

その拠点をアメリカにするか、日本にするかはまだ決められないのだとも。

「一つ一つが違う新しい技術に触られるという仕事の面白さは、日本でもアメリカでも同じです。今の職場では、日本とアメリカの違いも見ることができて、2倍楽しめます。」

氏はそのキャリアを幸運に恵まれたおかげだと言う。しかし、物怖じせずに目標に挑戦して、努力を続けたからこそその幸運だろう。仕事に対するポジティブな姿勢で、グローバル化の時代をしなやかに駆けめぐり、活躍されるに違いない。

(取材・構成 藤井 久子)